

意味役割の差による英文の多義性と改訂束ね理論

石井 隆之

Theta role-related Polysemy in English Sentences and the Revised Bundling Theory

Takayuki ISHII

Polysemy in English sentences that is not based on structural differences at the S-structure level can be provided with a principled explanation through the previously proposed Quantifier Raising Principle (QR) if the sentence in question contains two or more quantifiers; however, other types of non-structurally produced polysemy cannot be satisfactorily explained by the same principle. In this paper, I will demonstrate without resorting to QR that polysemy resulting from differences in theta roles can be explained through the new Revised Bundling Theory proposed here. This is a revised version of the theory suggested in a previous paper of mine. The revision consists of the combination of the previous theory with the newly proposed Polysemy Derivation Theory, which also has the potential to explain structural polysemy under the same principle as non-structural polysemy. Therefore, this paper aims ultimately to explore the possibility of solving all the problems related to polysemy, whether the polysemy in question is produced structurally or non-structurally, through the same Revised Bundling Theory.

キーワード：① 非構造的多義性 ② 派生多義論 ③ 改訂束ね理論 ④ 束ね原理 ⑤ 意味役割

0. はじめに

生成文法において、言語の統語現象を成立させる数個の原理を統括する原理に「経済性の原理」というものがある。^{注1}

この経済性の原理は、「言語のしくみは複雑性を避ける傾向がある」とするものであるが、確かに言語の仕組みが複雑であると、言語本来のコミュニケーションや思考の手段としての役割に支障をきたすので、この原理は自然に納得できる。^{注2}

ここで、いわゆる「多義性」はく「経済性の原理」違反となる。というのは、多義であることは、複雑性を避けていないからである。

言語は多義性を好むのではなく、偶然に多義が生じている。しかも単純性を求めるがゆえ

に、多義性が生じていると考えられる。もし、言語の仕組みが複雑であれば、構造に似通った状況が起こりにくくなり、多義は生まれにくい。したがって、多義性は経済性の原理が言語現象に内在しているがゆえに起こっているものだと思われる。

また、言語自体は複雑性を嫌うのだから、多義性は、初めから厳然と存在しているものではないと考えるのが妥当であろう。

二義性の問題に焦点を絞ると、二義のうち、どちらかが主である。つまり、すべての二義性は、主なる第1義があり、そこから、第2義が派生すると考えられるのではないかと思われる。初めから二義が存在しているよりも、派生して二義性が発生したとする方が、経済性の原

理に沿うからである。

本稿では、第1章で、「そもそも論」(「何故そもそも多義性が存在するのか」)に関する議論を通じ、「派生多義論」(多義は派生して起きているという理論)を提案する。

更に、多義性の2種類(構造的多義と非構造的多義)の両方に派生多義論が当てはまることも示す。

第2章では、非構造的多義を分類し、「数量詞によって多義性を説明する」という従来の数量詞上昇で説明できない多義性について、石井(2011, 2012a, 2012b)を通して提案した「束ね理論」を用いた説明を紹介する。

第3章では、派生多義論と石井(2012b)で提案した束ね理論に整合性が認められることを示し、これらの視点から、非構造的多義性の代表的な例としての「意味役割の差による多義性」を分析し、原理的説明を施す。

したがって、派生多義論を提案し、これが束ね理論を支えている事実と、統語論の視点から困難であった意味役割の差による多義性の説明を試みるのが、本稿の目的である。

本稿の最終章(=まとめ)では、構造的多義性をも束ね理論で説明できる可能性を含め、派生多義論と束ね理論の組み合わせの発想が持つ新たな可能性についても言及したい。

1. 一義的特質と派生多義論

1.1. 多義性の二種類

多義性には、統語構造の違いによるもの(構造的多義性)と統語構造の違いによらないもの(非構造的多義性)の2つに大別できる。

(1) 多義性の二種

- a. 構造的多義性
- b. 非構造的多義性

それぞれの例を挙げてみよう。(2a)が(1a)、(2b)が(1b)の例である。

- (2) a. Jim decided on the boat.
- b. Bill hit the car.

(2a,b)の意味は、それぞれ2つの意味を持つ。(2a)は(3a, b)に、(2b)は(4a, b)に対応する。

- (3) a. ジムは船(で行くこと)に決定した。^{注3}
- b. ジムは船の上で(何かを)決定した。

- (4) a. ビルはその車を殴った[車が被害者]。
- b. ビルはその車におつかった[ビルが被害者]。

(3a)では decide on がまとまって熟語の解釈となっているのに対し、(3b)では on the boat がまとまって decide を修飾する構造となっている。

これに対し、(4a)と(4b)は同じ SVO の構造なので、統語構造の差が生じることなく、多義性が生じている。

1.2. 多義の特性

言葉を発する側に多義の意識はない。例えば、(2a,b)共に、この文を発する側には、意味が明確なはずである。

多義の問題は、言葉の受け手に存在する。これらの文を文脈内で、聞いたり読んだりする場合は、原則として、多義の問題は発生しない。文脈が文の意味を決定する要因になるからである。

(2a,b)のような文を単独で受け取った場合に多義の問題が発生する。その場合、同時に頭の中に多義が発生するというものではなく、多義の認知に時間的な差が存在する。

ということは、多義文を一番最初に認知する意味が必ず存在することになる。つまり、多義には「第1義」が必ずあるということである。これが多義の重要な特性であると思われる。

例えば、(2a)文が単独で現れた場合、(3a)文の解釈が第1義である。decided on のところまで、聞いたり読んだりした時に「…に決定する」の意味だと解釈するからである。^{注4}

そして、on the boat まで来たときに、この句自体が「船上で」の意味を持つので、脳内で再分析が行われ、この文は多義であると認識されるのである。^{注5}

また、(2b)文が単独で生じた場合、(4a)の解釈が第1義であると思われる。というのは、名詞の次に動作動詞が来ると、その名詞は主語として認識され、しかも、最も主語の典型的な

意味、つまり、意志を持つ主語と認識される。

その結果、主語に与えられる意味役割は「動作主」である。このことが、(4a)を第1義とする理由である。

次に、hit the car というつながりが、より自然な hit the man のつながりと異なるため、主語が「(意志を持たない)主題」としての役割を持つ可能性が浮上し、(4b)の意味をも認識するのである。ここで、聞き手や読み手は、(2b)文が多義であることを確認するのである。^{注6}

1.3. 派生多義論

1.2. で論じたように、多義性は、受け手の認識の問題で、認識に段階性があるということ、そして、その段階性には、第1義がすでに決定されていると考えてよい。

つまり、多義性という現象は、生成文法における疑問変形のような時間超越性はなく、コミュニケーションの受け手における時間制限的な派生を基本とすると考えることができる。この考え方を「派生多義論」と呼ぶことにする。

すなわち、多義性が同時に起こっているのではなく、時間的な派生が起こっているということである。そして、第1義(=派生以前の原型)に一定の傾向が見られると考えてよい。これを多義傾向と呼ぶ。

(2a,b)の例において、多義傾向をまとめてみることにする。(2a,b)は、それぞれ(5)(6)に相当する。

(5) イディオム文における多義傾向

第1義：イディオム

傾向：イディオム⇒文法

(6) SV(動作動詞)文における多義傾向

第1義：S = 動作主

傾向：S[動作主]⇒S[主題]

(5)は構造的多義文に関係し、(6)は非構造的な多義文に関係するものであるから、派生多義論は、構造・非構造に関わらず、両方に当てはまるということがわかる。

非構造的な多義のパターンは、次章で論じるとして、ここでは構造的な多義のパターンをイディオム文以外の文について、その多義傾向を示し

ておきたい。

まず、構造的な二義文を分類し、それぞれに例文を1つ示し、二義を挙げる。そのあとでまとめて、多義傾向を記述したい。

(7) 副詞文中文

Nancy carelessly drank the water.

a. 不注意にも、ナンシーはその水を飲んだ。

b. ナンシーのその水の飲み方は不注意だった。

(8) 不変化詞動詞直後文

The doctor looked over his shoulder.

a. その医者は彼の肩を診察した。

b. その医者は肩越しに(何かを)見た。

(9) 副詞句含有否定文

Lucy didn't study until 11 p.m.

a. ルーシーは午後11時までずっと勉強を続けたわけではない。

b. ルーシーは午後11時になって初めて勉強を始めた。

(10) 助動詞含有否定文

You may not stay here.

a. あなたはここに留まってはならない。

b. あなたはここに留まらなくてもよい。

(11) 完了構文

Ann has lived in Japan for three years.

a. アンは日本に来て3年になる。

b. アンは日本に3年住んだことがある。

さて、(7)~(11)文の多義傾向は、次のようなものであると想定できる。最初に、これらの文の受け手が認識する意味である第1義に対し、派生した第2義を発展義として、多義傾向を表にする。

つまり、多義文の代表として二義文(2つの意味にとれる文)を扱って、多義傾向を提案する。

(12) 構造的二義文の多義傾向

第1義		発展義	
(7a)	文副詞解釈	(7b)	様態副詞解釈
(8a)	副詞解釈	(8b)	前置詞句解釈
(9a)	動詞修飾	(9b)	否定辞修飾
(10a)	助動詞接近	(10b)	動詞接近
(11a)	継続解釈	(11b)	経験解釈

それぞれの第1義の理由は、次のとおりであると思われる。なお、(13a-e)はそれぞれ(7)～(11)に対応する。

(13) 第1義の理由

- 文副詞は文の前方、様態副詞は通常動詞句末にくる。だから、主語の直後に副詞が来ると、文副詞である可能性が高い。
- 「動詞＋不変化詞」のつながりは強固なので、「動詞＋前置詞句」に勝る。^{注7}
- 直後の副詞節は、統語的に遠い「否定辞＋動詞」よりも、近くの動詞自体を修飾するのが自然である。^{注8}
- 出現する否定辞は、助動詞と結び付くのが自然である。^{注9}
- for 句があるので典型的意味の継続をまず認識する。

(2b)と(4a,b)では非構造的多義をも派生多義論で説明できることを示したので、派生多義論は、構造・非構造に関わらず、当てはまる理論であると言ってよい。

2. 束ね理論による非構造多義の説明

2.1. 非構造多義の分類

非構造多義の例を挙げる。^{注10}

- (14) a. Three boys saw two girls.
b. Everybody loves somebody.
c. I want to marry an Italian.
d. The tiger is strong.
e. Jack met his wife there.
f. Peter almost killed Betty.
g. Liz is a beautiful typist.

- h. There is a cat behind the car.
i. Jim got Ann into trouble.
j. Bill hit the car. [= (2b)]
k. Bob loaded the trucks.

非構造的多義は、主として、以下のように分類できるのではないかと推察する。

(15) 非構造的多義の分類

- 数量詞含有文
- 冠詞二義解釈文^{注11}
- 副詞二義解釈文^{注12}
- 概念構造曖昧文
- 視点由来曖昧文
- 文脈依存特殊意味文
- 意味役割複数解釈文

(14)で挙げた非構造的多義文を(15)のどれに相当するかを示しておく。(16a-g)は、それぞれ(15a-g)に対応する。

(16) 非構造多義分類と具体例

記号	略称	例文番号
a	数量詞文	(14a) (14b)
b	冠詞二義文	(14c) (14d)
c	馴れ初め文	(14e)
d	概念曖昧文	(14f) (14g)
e	視点曖昧文	(14h)
f	文脈依存文	(14i) ^{注13}
g	θ 役曖昧文	(14j) (14k)

2.2. 非構造的二義文の多義傾向

1.3. の(12)で構造的二義文の多義傾向を示したが、ここでは、非構造的二義文の多義傾向を提案する。

(17) 非構造的二義文の多義傾向

No.	第1義	発展義
(15a)	主語束ね	目的語束ね
(15b)	冠詞基本義	冠詞発展義
(15c)	通常解釈	再分析解釈
(15d)	通常修飾	概念内修飾
(15e)	主題の視点	話者の視点
(15f)	一般義	特殊義
(15g)	代表的 θ 役	発展的 θ 役

それぞれの第1義が(17)のようになる理由を

簡単に示す。(17)における(15a-g)はそれぞれ(18a-g)に対応する。

そして具体的例文における第1義の解釈は、注10の(i)から(xi)のそれぞれaの解釈である。

(18) 第1義の理由

- a. 英文は主語から始まっているため、その主語の数量のまとまりが、まず認識される。^{注14}
- b. 冠詞の基本義がまず認識される。例えば不定冠詞であれば「不定」の意味、定冠詞であれば「定」の意味が基本義である。
- c. 名詞の文字通りの解釈が基本であるのは理にかなう。^{注15}
- d. 形容詞や副詞が、語句そのものを修飾するのが基本で、単語内のある概念を修飾するのは二次的である。^{注16}
- e. 文内の主題の視点から解釈するのが第一で、その解釈ができない場合は、話者の視点で解釈する。^{注17}
- f. 文脈を想定しない文字通りの解釈を優先して認識される。
- g. 文の主語は、優先的に動作をする主体として、目的語は直接影響を受ける客体として、認識される。^{注18}

2.3. 非構造的二義文と多義性3条件

非構造的二義文の中でも数量詞文は、通例、数量詞上昇によって説明される。

数量詞上昇は、LFに2つの数量詞が上昇し、その支配関係の差によって意味の差を説明するものである。

everybody や somebody も数量と関係があるので数量詞と見なし、数量詞上昇が起こると考えると、(14b)文は、次のようなLF表示が可能である。

- (19) a. $[_{IP1} \text{everybody}_i [_{IP2} \text{somebody}_j$
 $[_{IP3} t_i \text{ loves } t_j]]]]$
 b. $[_{IP1} \text{somebody}_j [_{IP2} \text{everybody}_i$
 $[_{IP3} t_i \text{ loves } t_j]]]]$

- (20) a. 誰でも愛するひとが1人いる。
 b. ある1人が皆に愛されている。

(19a,b)がそれぞれ(20a,b)に対応する。

数量詞上昇は、May(1977)の用語で、一般に、数量詞を含む名詞句のLFでのIP付加の方法が2種類生じることにより、数量詞の作用域も2種類となり、それにより、意味の二義性を説明する理論と言える。

石井(2011)では、数量詞上昇による意味の複数性を生じるメカニズムを詳述し、数量詞上昇が起こる条件を3つ提案した。

石井(2012a)では、冠詞も数量詞と考え、新たな冠詞含有名詞句の構造記述を提案するとともに、意味の二義性を説明する原理が、(19a,b)の場合と全く同じであることを提案した。

更に、石井(2012b)では、新たに提案した「束ね理論」が数量詞上昇に変わる二義性の説明原理となりうる可能性を示唆した。

石井(2011)における数量詞上昇誘発3条件を挙げる。

(21) 非構造的な多義性条件 A

数量詞数条件： $n(Q) \geq 2$

これは、1文中に2つ以上の数量詞を有すると、非構造的な多義性を持つ文になりうるということである。

ところが、(22a,b)文のような文が多義ではないことから、(23)の条件を提案した。

- (22) a. Somebody loves everybody.
 b. One boy met two girls.

(23) 非構造的な多義性条件 B

数量条件： $n(N/Q1) \geq 2$

1文に最初に現れる数量詞が表す数が2以上であれば、非構造的な多義性を持つ文になりうる。

(23)は、文の最初に現れる名詞が表すものの数が2以上であることを要求している。しかし、これでも(24a-d)文や(25)文が更に多義ではないので、(26)の条件を提案した。

- (24) a. Everybody met John in some Italian city.
 b. Everybody in some Italian city

- met John.
 c. In every Italian city, John met somebody.
 d. In every Italian city, somebody met John.
 (25) Who bought everything for Max?
 (26) 非構造的多義性条件 C
 数量詞間最大投射範疇数条件:
 $n(XP[Q_k - Q_{k+1}]) = 4$

これは、1文に現れる数量詞間に存在する最大投射範疇の数が4つであれば、非構造的多義性を持つ文になりうるということである。

2. 4. 非構造多義を「束ね」で説明する

石井(2012b)で提案した「束ね理論」に基づく説明を、同論文で扱った非構造多義文を中心に、再度簡単に紹介する。^{注19}

なお、(27)～(38)において、奇数番号の文の束ね解釈[=例えば(28)のように束ねの状況を記述すること]は、それぞれ次の偶数番号に相当し、第1義に相当する束ね表記[=(28)を例にとれば「S > O」のように表記すること]は、全てbの表記に当たる。

- (27) Three boys saw two girls.
 [= (14a)]
 (28) a. $S > O \rightarrow G1 + G2$
 b. $O > S \rightarrow B1 + B2 + B3$
 S = Subject, O = Object
 G = girl, B = boy
 (29) Everybody loves somebody.
 [= (14b)]
 (30) a. $S > O \rightarrow Ok [1 \leq k \leq n]$
 b. $O > S \rightarrow S1 + S2 + \dots + Sn$
 S: Subject O: Object
 (31) Jack met his wife there. [= (14e)]
 (32) a. $Jack > his\ wife \rightarrow wife1 + wife2$
 b. $his\ wife > Jack \rightarrow Jack$
 wife1 = woman before marriage
 wife2 = woman after marriage
 (33) Peter almost killed Betty. [= (14f)]
 (34) a. $Peter > Betty \rightarrow Betty1 + Betty2$
 b. $Betty > Peter \rightarrow Peter$

- Betty1 = person before the event
 Betty2 = person after the event
 (35) There is a cat behind the car.
 [= (14h)]
 (36) a. $car > cat \rightarrow cat1 + cat2$
 b. $cat > car \rightarrow car$
 cat1 = a cat seen from the car
 cat2 = a cat seen by the speaker
 (37) Jim got Ann into trouble.
 [= (14i)]
 (38) a. $Jim > Ann \rightarrow Ann1 + Ann2$
 b. $Ann > Jim \rightarrow Jim$
 Ann1 = person in trouble
 Ann2 = person in specific trouble

非構造二義を説明するのに、2つの名詞句AとBにおいて、AがBを束ねる場合と、BがAを束ねる場合の2種類があることを示せることが、束ね理論では重要となってくる。

しかし、2つの名詞句が存在しているだけでは2つの意味を持つとは限らない。例えば、(39)文を考察する。

- (39) John loves Mary.

(39)文において束ね状況を示すと、次のようになる。

- (40) a. $John > Mary \rightarrow Mary$
 b. $Mary > John \rightarrow John$

しかし、(39)文は二義ではない。実は、束ね状況を記述して、二義となる条件が2つあるのである。

- (41) 二義性条件

次のaとbを同時に満たすとき二義性は実現する。

- a. 束ねる側の要素が単数の解釈となる。^{注20}
 b. 束ねられる側の要素が、少なくとも1つ、次の状況のどちらかである。

(P) 複数存在する。^{注21}

(Q) 質が変化する。

(40)においては、(41a)は当てはまるが、(41b)は当てはまらない。MaryもJohnも単数であるし、どちらも変化していない。した

がって二義性条件を満たさないで、二義とはならないと考える。

一方、(27), (29), (31), (33), (35)および(37)は、(41a, b)がともに当てはまる。そのうち、(27)と(29)は(41b)の(P)を満たし、(31), (33), (35)および(37)は(41b)の(Q)を満たす。

3. 意味役割の差による二義性

3.1. 派生多義論と束ね理論

まず、石井(2012b)で示した束ね理論を構成する「束ね原理」を紹介する。

(42) 束ね原理

NP1 から NPn まで n 個の名詞句が数量詞化されると n! 種類の作用域が現出し、 $NP_{\alpha} > NP_{\beta}$ において NP_{α} は NP_{β} を束ねる。但し、 α と β の関係は a または b である。

a. $\alpha = k, \beta = k + p [1 \leq k \leq n-1]$

b. $\alpha = k + p, \beta = k [1 \leq k \leq n-1]$

但し a, b において、p は次の範囲

$$1 \leq p \leq n - k$$

「NP の数量詞化には個々の事情があるが、いったん数量詞化すれば、この原理が適用されると考えると、従来の『LF での数量詞上昇』を想定しなくても、多義性が説明できることになる」という趣旨の結論を、石井(2012b)で示した。

しかし、そもそも数量詞上昇を仮定しなくてもよいということは、名詞の数量詞化も、もはや想定する必要はない。

そこで、数量詞化を条件として束ね現象が起こるとする(42)の「束ね原理」を、(41)の二義性条件を用いて、再構築することになろう。^{注22}

名詞句が複数生じた場合、束ね現象がそもそも起こるものと仮定し、その状況で、任意の2つの名詞句に、ある制限（つまり「二義性条件」）が掛かって、二義性が発生し、これがすべての名詞句に当てはまり、多義性が発生するという原理に再構築するのである。その原理を「改訂束ね原理」と命名し、次のように提案したい。

(43) 改訂束ね原理

a. 束ね原理 A : NP1 から NPn まで n 個の名詞句が一文内に存在するとき、n! 種類の作用域が現出し、 $NP_{\alpha} > NP_{\beta}$ において NP_{α} は NP_{β} を束ねる。但し、 α と β の関係は a または b である。

a. $\alpha = k, \beta = k + p [1 \leq k \leq n-1]$

b. $\alpha = k + p, \beta = k [1 \leq k \leq n-1]$

但し a, b において、p は次の範囲

$$1 \leq p \leq n - k$$

b. 束ね原理 B : 任意の束ね関係にある2つの名詞句が、次の2つの条件(α, β)を持つとき、当該の2つの名詞句に二義性が発生する。

α . 拘束子が単数の解釈となる。

β . 被拘束子が、少なくとも1つ、次の状況のどちらかである。

(P) 複数存在する。

(Q) 質が変化する。

c. 束ね原理 C : 原理 B の状況が複数存在すると多義性 (n! 義性) を発生する。但し、n は1文における名詞句の数である。

(43)において、束ね原理 B は「二義性条件」である。

以降、束ね原理 A, B, C を、原理 A, B, C と略称することにする。

多義性の発生は、改訂束ね原理を用いて、次のように説明できる。

(44) a. 原理 A のみを満たす

⇒一義性

b. 原理 A, B を満たす

⇒二義性

c. 原理 A, B, C を満たす

⇒多義性(二義を超える)

この節で提案した改訂束ね原理において、1.3.で提案した派生多義論が関与する部分は、(43b)の原理 B の β の(Q)である。

名詞句の数量的変化（複数存在すること）に対し、名詞句の質的変化（存在の数量は指定しないが、意味内容などが変化する）を暗示する(Q)が、改訂束ね原理に組み込まれている

わけで、先に提案した派生多義論と本原理が整合性を持つことが、これで理解できる。

3. 2. 意味役割の差と改訂束ね理論

2.4. で非構造多義の例を束ね理論で説明したが、本節では、意味役割による差を、3.1 で提案した「改訂束ね原理」から成る「改訂束ね理論」で説明することを試みる。

なお、(45) (47)において、第1義は、それぞれ(46a) (48a)に相当する。

(45) Bill hit the car. [= (14j)]

(46) a. Bill > the car → the car

b. the car > Bill → Bill1 + Bill2

Bill1 = functioning as Agent

Bill2 = functioning as Theme

(45)文は主語名詞句 Bill の θ 役割が変化する。(18g)で提案したように、まず、Agent (動作主) が現れ、次に Theme (主題) へと変化する。

この θ 役割の変化を、(43b)の原理 B により、目的語名詞句 the car が束ねる。原理 A と原理 B を満たすことになり、二義性が証明される。

(47) Bob loaded the trucks. [= (14k)]

(48) a. the trucks > Bob → Bob

b. Bob > the trucks

→ trucks1 + trucks2

trucks1 = functioning as Theme

trucks2 = functioning as Location

(47)文は目的語名詞句 the trucks の θ 役割が変化する。(18g)の提案に従い、まず、Theme (主題) が発現し、次に Location (位置) が出る。^{注23}

この変化を原理 B により、主語名詞句 Bob が束ねた結果、原理 A, B 共に満たすので、二義性が得られる。

4. まとめ

本稿の第1章で、多義は同時存在するのではなく、派生により生じるという発想の「多義派生論」を提案し、構造的な多義の認識の在り方を論じた。

第2章では、非構造的な多義について分類し、多義派生論が非構造的な多義についてもあてはまることを示した。同時に、石井(2011)で論じた多義性3条件を紹介すると同時に、特に石井(2012b)で提案した「数量詞上昇に代わる束ね理論」を用いた非構造多義の説明を紹介した。

第3章では、先に提案した「多義派生論」と「束ね理論」を組み合わせ、「改訂束ね理論」を構築し、これまでに説明をしていない「意味役割の差による多義性」を新たな枠組みで説明した。

ここで、特筆しておきたいことは、多義派生論に基づく二義性条件を組み込んだ改訂束ね理論は、非構造多義性のみならず、構造多義性も説明できることがわかった。というのは、二義性条件は、構造多義にも適用できるからである。

構造・非構造に関わらず、また、二義やそれ以上の多義に関わらず、幅広い多義性を説明できる方式を構築したのではあるが、今後の研究課題も多い。

例えば、石井(2012a)で扱った冠詞の二義性を改訂束ね理論で説明できるかどうかは、今後の課題である。^{注24}

注

1. 経済性の原理 (economy principle) は原理を統括する原理なので「原理の原理」とされる。

2. とはいえ、言語の仕組みが単純すぎると、現実世界の複雑な状況を正確に表せないもので、単純を目指すのであるが、ある程度の複雑性を保っていなければならないという絶対的矛盾を抱えているとも言える。

例えば、経済性の観点からすると、使用文字が少ないほうがよいが、少ないといろいろな状況を表しにくい、したがって、英語のような言語では、26文字というのが最も効率的ということになっていると思われる。4文字のアルファベットでは少なすぎるし、100文字のアルファベットでは多すぎる。更に、厳密な視点からすれば、25

- 文字でも少ないし、27 文字では多いのである。だから英語のアルファベットは 26 文字に落ち着いたと考えられる。
3. (3a) の典型的な意味は「船で行くことに決めた」となるが、「(絵を描く際に) 船を描くことに決めた」などいろいろな意味の可能性がある。
4. 認知の順と歴史の順とは必ずしも一致しないと思われる。例えば、歴史的には、イディオムは後で発生するので、(3b) から (3a) の意味へと発展した。これに対し、認識は (3a) から (3b) へと展開する。これは、心理的時系列と歴史的時系列が異なる例である。
5. decided on の直後に、on 句がまとまらない場合 (つまり「…の上で」の表現が来ないなど)、例えば、the alternative plan などが来ると、on 句の再分析が起こらず、最初のイディオムのままで、認識が変更されることはないので、多義とはならない。なお、イディオム解釈が第 1 義的になるという仮説は、ネイティブスピーカーによる調査で確認済みである。
6. 例えば、主語に bus など意志を持たない主語が来ると、最初から「主題」であると認識され、多義性は排除される。
7. 不変化詞とは動詞に付く over, out, off などの副詞のことで、動詞とは密接な関係を保つ。動詞と密接な関係を保つ表現が第 1 義になることは頷ける。前置詞句は、これ自体で固まっているのであるが、動詞との結びつきが強いイディオムがあれば、それが第 1 義になるのは、(2a) と (3a,b) で確認済みである。第 1 義になる傾向として、次の順序になることがわかる。
- (i) 不変化詞 > イディオム > 前置詞句
8. 動詞が until 句とは共起しないものであれば、「否定辞 + 動詞」を until 句が修飾し、二義性は消える。
- (i) Lucy didn't arrive until 11 p.m.
a. *ルーシーは午後 11 時までずっと到着したわけではない。
- b. ルーシーは午後 11 時になって初めて到着した。
- 一方、継続の意味を強く表す動詞であれば、「否定辞 + 動詞」を until 句が修飾できず、通常、二義性は確認できない。
- (ii) Lucy didn't stay here until 4 p.m.
a. ルーシーは午後 4 時までずっとここにいたわけではない。
b. *ルーシーは午後 4 時になって初めてここにいた。
9. 聞き手や読み手が may not を聞いたり読んだりした瞬間、これを 1 つの塊と認識するので、「…してはならない」の意味が第 1 義となる。
10. それぞれの文が持つ 2 つの意味は次の通りである。(14a-k) はそれぞれ (i-xi) に対応する。
- (i) a. 3 人組の少年が、あるとき 1 人の少女を見て、また、別のときもう 1 人の少女を見た。
b. 1 人目の少年が、2 人組の少女を見て、2 人目の少年が、別の 2 人組の少女を見て、3 人目の少年が、更に別の 2 人組の少女を見た。
- (ii) a. みんながまとまってある人を愛している。
b. 一人一人に愛している人がいる。
- (iii) a. 私はイタリア人なら誰でも結婚したいと思っている。
[イタリア人を結婚相手の条件としている]
b. 私はあるイタリア人と結婚したいと思っている。
[結婚したいという人がたまたまイタリア人である]
- (vi) a. その特定のトラは強い。
[特定のトラについて述べている]
b. トラという動物は強いものだ。
[トラ全体について述べている]

- (v) a. ジャックはそこで妻と落ち合った。
[女性は既に妻である]
b. ジャックはそこで、将来妻となる人と出会った(実際妻になった)。
[会った時点では、女性はまだ妻でない→馴れ初めを述べている]
- (vi) a. ピーターは危うくベティを殺すところだった。
[ベティは無傷]
b. ピーターはベティをほとんど死ぬ状態にした。
[ベティは重傷]
- (vii) a. リズは美しいタイピストだ。
[リズはプロのタイピスト]
b. リズは印字が美しく打てる人だ。
[リズは普通の人]
- (viii) a. 車の後ろに猫がいる。
[視点は車]
b. 車の背後に猫が隠れている。
[視点は話者]
- (ix) a. ジムはアンを困らせた。
b. ジムはアンを妊娠させた。[俗語]
- (x) a. ビルはその車を殴った。
[Billの意味役割は agent]
b. ビルはその車にぶつかった。
[Billの意味役割は theme]
- (xi) a. ボブはそのトラックを(何かに)積み込んだ。
b. ボブはそのトラックに(何かを)積み込んだ。
11. 二義解釈とは特定・不特定の二義に解釈できることを意味する。例えば、I bought a pen. という場合、a pen は特定の物を頭に浮かべることができるので、二義に解釈できない。I need a pen. という場合、a pen は頭に具体的な物を想定できず、不特定の解釈になるため、二義に解釈できない。なお、前者と後者の a pen はそれぞれ、次の英文に近い。
- (i) I bought some pen.
- (ii) I need any pen.
12. 副詞の存在によって二義に解釈できるため、冠詞二義解釈文に倣い、副詞二義解釈文としたが、(14e)は「馴れ初め」を述べる文なので、これを副詞二義解釈文の代表的な例として、分かりやすいという意味も込め、「馴れ初め文」とも呼ぶことにする。
13. (14i)文の発展義は、推論を含む婉曲的語法と言えるので、非構造多義の問題とは別の枠組みで捉えなければならないと考えることもできる。
14. (14a)について第1義は、「3人の少年がまとまって少女を見た」ということになるので、「主語が束ねられている」と解釈でき、第1義を「主語束ね」と表記している。これは、少年3人のまとまりが基本であって、その3人があるときある場所で見えた少女の数は特に指定しない。二義性の観点からは、「3人組の少年があるとき1人の少女を見て、べつのときもう1人の少女を見る」という解釈が第1義であると考えられる。ゆえに「3人の少年一人一人が2人組の少女を見た」は第2義となるが、これは、目的語2人がまとまっているので、「目的語束ね」(=「目的語が束ねられている」)と表記している。但し、文字通りの「3人組の少年が2人組の少女を見た」という複合的解釈が第1義のように考えることができるが、どうしてこういう事態が生じるのかは、今後の研究に委ねる。
15. 例えば、(14e)文で、wife という名詞は「(現在の)妻」を第1義的に表し、「(将来妻になる)人」は第2義的である。
16. 例えば、almost V の場合、「もう少しで V するところ」を意味するのが、語句そのものの修飾。
- (i) I almost finished it.
- (i)は実際には finish していないことを暗示する。
- ところが、V によっては V の概念構造が意味をあいまいにするものがある。その例として kill が挙げられる。kill は cause

a person to die という概念構造を持ち、almost kill という句において、この概念構造内の die を almost が修飾すれば「瀕死の状態にする」を意味することになる。語句そのものの修飾の場合は、「kill をしようと思ったがしなかった」となる。従って、kill の目的語は無傷であることが暗示される。

更に、次の例についても考察する。

(ii) He is a good cook.

a good cook を聞いたとき(見たとき)、a good wife(良い奥さん)のように、good を「良い、善良な、親切な」ほどの意味に解釈するのが第一義で、(ii)の解釈も第1義的には「彼は善良な(プロの)コックだ」の意味になる。しかし、cook の概念構造は a person who cooks で good が cooks の部分に疑似修飾すると、「料理がうまい(アマチュアの)人」となる。この解釈が発展義として生まれる。このような二義性は、名詞の持つ概念構造によることは言うまでもない。

17. 視点は文中の主題が優先される。

(i) John loves his wife.

(ii) John's wife loves him.

(iii) Mary loves her husband.

(iv) Mary's husband loves her.

John と彼の妻 Mary が相思相愛の仲とすると、(i) (ii) は John の視点から述べた文で、(iii) (iv) は Mary の視点から述べた文である。

(v) John's wife loves Mary's husband.

(v) は John の視点と Mary の視点が混ざった文と判断すると、非文である。というのは、1文に視点は1つという原則があるからである(これも economy 原理の一例である)。

(v) のような場合に、話者の視点に視点が移される。その場合、John's wife = Mary、Mary's husband = John と判断されない点に注意すべきであろう。(v) は不倫関係を匂わせるのである。

(vi) There is a cat behind the car.

(vii) There is a cat behind the tree.

(viii) The cat is behind a car.

(ix) The cat is behind a tree.

主題の視点が優先されるということは、(vi) と (vii) については、それぞれ車と木の視点から意味が認識される。(vi) の車は前後があるので、車の後ろは理解できるが、(vii) の木には前後がないので木の後ろ [= 後部] (「背後」なら理解できるかもしれないが…) は存在しない。

だから、(vii) については強制的に話者の視点に視点が移動することになる。この場合は「木に隠れて」のニュアンスとなる。一方、(vi) も話者の視点で捉えることが可能で、その場合「車に隠れて」のニュアンスとなる。

(viii) と (ix) はどちらも主題は猫なので、猫の視点から behind… を捉えるのであるが、事情は (vi) (vii) と同じである。

18. 一般動詞を動詞に持つ多くの主語がそうであるように、主語は意志を持つ存在である。

(i) John surprised Mary.

(i) の John は意志を持つ存在としての解釈「ジョンはメアリーを驚かせた」が第一義的な解釈となる。surprise は「物事が人を驚かす」の意味も出ることから、John が単なる主題の意味役割を持ち「ジョンを見てメアリーは(ジョンの風貌などに)驚いた」の解釈が発展義として出る可能性がある。

(ii) Jack called me...

(ii) を聞いて、まず me を直接目的語と認識する。ところが、(iii) のようになると、分析が SVOO と考えるのが普通で、me は間接目的語となる。

(iii) Jack called me a taxi.

意味役割の視点からは、まず、動詞により直接影響を受ける主題(Theme)が与えられていると認識され、(iii) で構文を再認識した後、受益者(Recipient)が与えられる。

このことは、動詞の直後は Theme が与えられることを意味している。現実 Jack called me. で文が終われば、Theme が与えられるからである。

19. 「A が B を束ねる」という状況を次のように表す。

(i) $A > B$

一般に SVO 構文で、S と O に数量詞が入っていると、意味が二義になる。

(ii) Three boys saw two girls.

[= (14a)]

a. 1 人の少年が 2 人組の少女を見る。

b. 3 人組の少年が 1 人の少女を見る。

(iia) は S (少年) が O (少女) を束ねており、(iib) は O (少女) が S (少年) を束ねている。その状況は、次のように表す。(iia-b) は (iia-b) に対応する。

(iii) a. $S > O \rightarrow \text{two girls}$

b. $O > S \rightarrow \text{three boys}$

同様に、他の非構造二義文にも、この発想を適用したのが、石井(2012b)である。

20. 束ねる側は、言語表記上複数の形や複数の意味であっても、その実体が 1 つの解釈となる。例えば(27)文では、S(主語)が束ねる側の場合は、言語表記上複数の形(three boys)であるが、「1 人の少年が 2 人組の少女を見る」という解釈になる。次に、O(目的語)が束ねる場合でも、「1 人の少女が 3 人に目撃される」という解釈がされるのだから、やはり 1 つの解釈である。

一方、(29)文では、S(主語)が言語表記上複数の意味(everybody)を持つが、これが束ねる側になると、「everybody の 1 人ひとりがだれか 1 人を愛している」という解釈になる。次に、束ねる側が somebody であれば当然、1 つの実体である。

なお、以後、束ねる側の要素(上記 2 文の最初の例では、three boys や everybody)を「拘束子」(bundler)、束ねられる側の要素(上記 2 文の最初の例における two girls や somebody)を被拘束子(blundlee)

と呼ぶことにする。これは、別の概念の束縛子や被束縛子と区別できるよう「拘束」を用いたものである。「束ねる」という行為は、「束ねられる側」を拘束するイメージを持つことに変わらない。

最後に、複数の意味の量表現(例えば 10 meters や 200 yen など)は、(動詞は単数で受けるものの)単数概念として捉えられないので、bundler にはなれない。したがって、二義性条件は満たされないので、二義は実現しない。

例えば、(i) 文を考察する。

(i) Ten kilometers contains 10,000 meters.

(i) の意味は、当たり前であるが 1 キロメートルがそれぞれ 10,000 メートルを含み (= 意味し)、それが 10 個あることを意味しない。

ところが、kilometers の代わりに halls、meters の代わりに people が入ると、それぞれのホールに 1 万人を収容することができるという解釈も成り立つ。

21. (30a) では O は 1 つしか束ねていないが、S の 1 つ 1 つが別々の O を束ねる可能性があるので、束ねられる側が複数なのである。ちなみに、別々の O を 1 つ束ねる可能性は、 $\langle \text{Ok}[1 \leq k \leq n] \rangle$ の表示で表されている。

22. 任意の 2 つの名詞句において、1 つの名詞句がもう一方の名詞句を束ねる事態が起こることを「束ね現象」と命名する。

23. load the trucks の意味は、第 1 義的には「トラックを (何かに) 乗せる」の意味となる。この場合、目的語名詞句に与えられる θ 役割は (動きを暗示する) Theme である。一方、第 2 義的には「トラックに (何かを) 乗せる」があるが、この場合、目的語名詞句に与えられる θ 役割は (動きを暗示しない) Location であると考えられる。

なお、日本語では、前者が「トラックを」、後者が「トラックに」と訳せるからと言っ

て、前者を直接目的語、後者を間接目的語とすることはできない。というのは、load は次のような構造がないからである。

(i) *Bob loaded the trucks the cars.

(ボブはトラックに車を積んだ)

石井(2000)では、(14k)の二義性を目的語の違いとして考察したが、それは誤りであったことを、ここで訂正しておきたい。

24. これまで名詞句の特性と他の構造的要素または意味的文脈との関係性により、多義派生が起り、その結果、束ね理論により、二義（または多義）が保証されるという状況であった。ところが、冠詞は、名詞句自体に深く関わっているため、これまでとは事情が異なるので、同じ原理で説明できるかどうかが未知であると思われる。

参考文献

- Gil, D. (1982) "Quantifier scope, linguistic variation, natural language semantics," *Linguistics and Philosophy* 5-4, 421-72.
- 池内正幸(1985)『名詞句の限定表現』大修館書店.
- 石井隆之(1999)「構造の曖昧性における支配関係と経路数」『大学英語文化学会論集』第11号, 83-99.
- 石井隆之(2000)「意味の曖昧性と数量詞上昇」『近畿大学教養部紀要』第31巻第3号, 103-25.
- 石井隆之(2011)「英文の多義性と数量詞上昇条件」『近畿大学総合社会学部紀要』(第1巻第1号), 61-73.
- 石井隆之(2012a)「英語における冠詞の多義性と数量詞上昇」『近畿大学総合社会学部紀要』(第1巻第2号), 39-47.
- 石井隆之(2012b)「副詞を含む英文の非構造的な多義性と束ね理論」『近畿大学総合社会学部紀要』(第2巻第1号), 13-23.
- May, R. (1977) *The Grammar of Quantification*, PhD. Dissertation.
- May, R. (1985) *Logical Form: Its Structure and Derivation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.